

**(土屋氏)** 入学当初から生徒に関わりながら「個に応じた支援」を行うことは、「未然防止」ということにもつながると考えています。

この事業の中で校内ユースワークと位置付けている手法があります。Y S W が昼休みや放課後に校内を回り、又は一緒に部活動に参加し、高校生たちに視線を合わせて関係性を作る。あるいは、学校の協力の下「校内カフェ」などを開催し、学校内に生徒たちがY S Wとフランクな関係で話ができる場を用意する。このような関係性の中から、Y S Wが生徒の悩みを受け止めていく。実は、このような方法こそ「個に応じた支援」を支える土台になっているのではないかと思います。



また、個にフォーカスしながら、「生徒たちが高校生活を続けていくにはどのような支援が必要か。」といった問題意識を、学校側－関係する先生方とY S Wが共有することも大切です。



そこで重要となってくるのが、「チームとしての学校」の視点です。例えば、個々の生徒のことを正確に把握するために、養護教諭との連携を密に行い、経済・生活面では学校事務職員の力を借りるという仕組みをつくるのが挙げられます。これまでは、一般的に、何でも「学級担任や学年に任せておけばよい。」という傾向がありましたが、これは抜本的に見直していく必要があるのではないのでしょうか。

**(横井氏)** 例えば、アメリカの学校では、S S Wが授業を持ったりしてソーシャルスキルトレーニングをやったり、非行グループや遅刻が多い子どもたちを集めてプログラムを受け持ったりしています。そういうイメージで中途退学防止のプログラムが開発できるのではないかと思います。

Y S Wであれば、チームを組みながら学校の中でそういった、ある程度標準化されたプログラムを展開できる可能性があると思います。

もう一つ、未然防止のためには、「啓発する」という視点もあってよいと思います。自傷行為予防のための本付録にDVD(注1)が付いているのですが、アメリカではそういったDVDを廊下に置いたテレビ画面で流しっぱなしにして、生徒に啓発をするというのです。「こういうお友達を見つけたら、信頼できる大人のところに連れて行ってね。情報提供してね。」というようなことを啓発しているわけです。

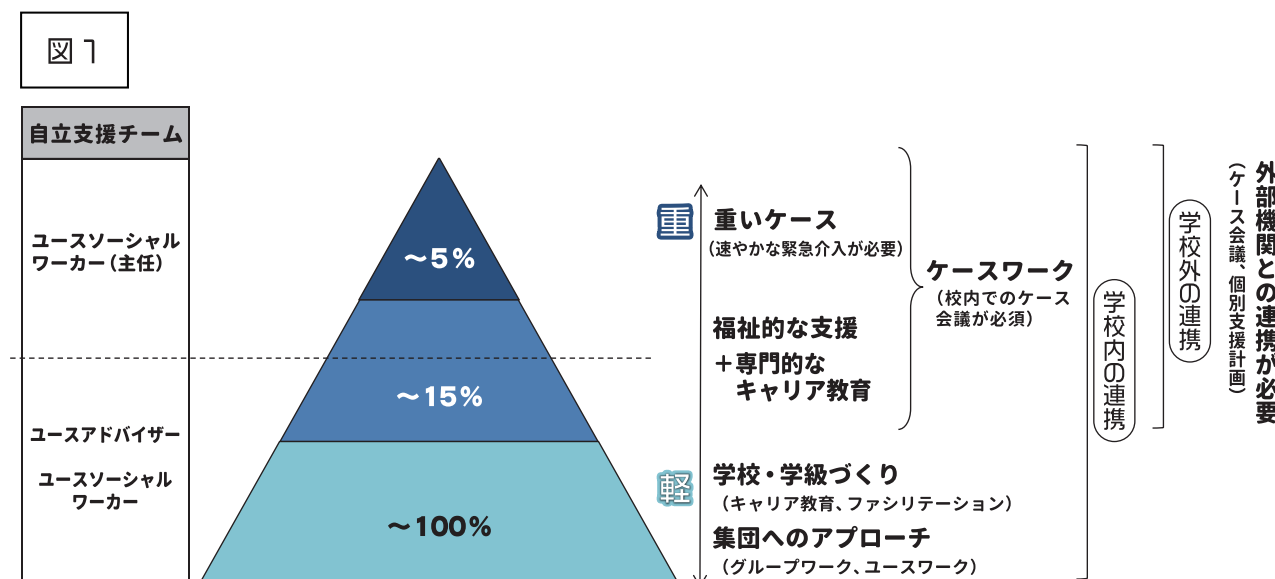
それを中途退学防止策に当てはめてみると、友達で欠席が増えてきた人がいたり、友達から、「もう(高校を)辞めようかな。」という相談を受けたりしたときに、誰のところに相談に行くのかなど、生徒が互いに援助希求性を高め合えるような取組ができるのではないかと思います。

また、違った観点では、学校関係者、Y S W等の役割を明確にして、インテンシブに(集中的に)専門職が関わる課題の層と、生徒相互間の関係を活性化させることでアプローチする層を次ページの図のように整理することで、「自立支援チーム」派遣事業の取組を構造化することも可能なのではないのでしょうか。

アメリカのレスポンス・トゥ・インターベンション(Response to Intervention)(注2)という現地S S Wにはよく知られた三角の図がありますが、三角の上の先端(1%から5%まで)

は、集中的で濃密な個別ケアを必要とする生徒へのアプローチであり、真ん中のところがターゲットを絞った集団への支援、一番下のところが、生徒全員に対するアプローチを表しています。

Y S Wはチームとして学校や生徒に関わっていくことから、技術や経験のある方が一番上のインテンシブな関わりの部分に対応する、集団のファシリテーションが上手な方やユースワークが得意な方は下の方の生徒相互の関係性を高めていくなど、アプローチする課題の階層、生徒の層に応じて対応する人や技術も分けて捉えていくこともできると思います。(図1参照)



Response to Intervention(注2)の図を基に土屋佳子氏が作成

**(土屋氏)** Y S Wには、就労支援を得意とする方、福祉支援を得意とする方、そして、主に複雑化・困難化するケースへの対応を担うY S W(主任)や、ユースワークにたけた方もいます。それぞれ得意とする分野に応じて、研修内容も変えていくことも必要かと思っています。

また、自立支援担当統括とともに研修(特にケーススタディ)を行うことも非常に重要になってくると思います。校内体制の組織化を進める上で、自立支援担当教員とともに、自立支援担当統括の果たすべき役割が大きいことからソーシャルワークとユースワークの視点を習得していただく機会を自立支援担当教員及び自立支援担当統括に提供する必要があると思います。

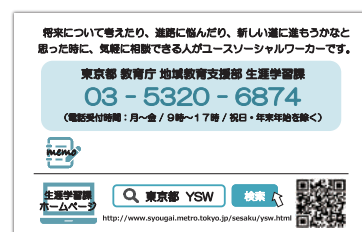
**(横井氏)** 自立支援チームのスーパービジョンをしていると驚くようなリスクの高いケースが点在しています。リスクへの対応も必要だと思います。

**(土屋氏)** リスクの高いケースの場合、支援の方向を見誤ると学校や学級の経営自体に響くこともあるという認識を、自立支援チームに関わる全ての関係者は持つべきだと思います。

この間、一人の先生が何気なくY S Wに支援を依頼したもののの中に、とても高度な対応が必要なケースが含まれていたということがありました。そういったケースに関してY S Wは、学校管理職や自立支援担当統括と十分な協議ができるよう要請する必要があるとともに、すぐに生涯学習課に相談するなど、迅速な対応が求められます。



ユースソーシャルワーカーカード(表)



ユースソーシャルワーカーカード(裏)